

田中 大輝（言語学）

接続名詞句のスコープと文の意味理解モデル

本論文は、「A や B」「A やら B やら」「A とか B とか」といった接続名詞句が持つスコープ解釈に注目することによって、「文そのものが持つ意味」とは何か、そして、我々の理解がそれを基にしてどのように成り立っているかという問題について議論したものである。

本論文が前提としている生成文法の立場では、ことばの運用の背景に、単語を組み合わせ、構造を作り、文を構築する計算システム（Computational System）が存在すると仮定している。一般には、計算システムの出力である表示（LF 表示）が別のモジュールで「解釈」されることにより、人間が文を発したり文の意味を理解することができると考えられているが、その具体的な仕組みについては、あまり議論が進んでいない。本論文では、LF 表示を意味の表示に変換したもの（SR）を「文そのものが持つ意味」とであるとみなし、(i) その意味表示（SR）に対して様々な推論操作を加えた表示（Modified SR）が存在すること、そして、(ii) その Modified SR が我々の文の理解におおいに影響を与えるということを主張している。

本論文では、まず、接続名詞句が様々な点において一般の量化表現ならば許されないはずのふるまいを見せるということが明らかにされた。一般の量化表現における制限を説明するためには、スコープを決定する操作において文法的な制限がかかっており、そのような SR が許されないと考えざるをえない。すると逆に、接続名詞句の場合のスコープは SR において直接表現されているものではありえないことになる。そこで、本論文では、「とりたて」および「個体視」という（認知的）推論操作を規定し、それらの操作の結果 Modified SR が生じると仮定することによって、接続名詞句に関わる現象がすべて統一的に説明できることを示した。さらに、接続名詞句以外の表現であっても、これらの推論操作が適用できる条件さえ整えば、同じような「例外的スコープ解釈」が生まれうることも示された。このように、文法外の推論操作に関してきわめて具体的な提案を行っている点が、本論文の重要な成果の1つである。

また、本論文は、計算システムの理論的研究に対しても大きな意義を持っている。スコープ解釈は、文法の理論的研究の様々な局面で言及されている現象である。一般的には、限られた代表例だけでスコープ解釈の観察とみなしてしまうことがよくあるが、本論文の成果により、どのような文脈でどのような表現を用いてスコープ解釈を観察しなければ、スコープ解釈を文法理論構築に利用できないかということが明らかにされた。このように、本論文は、文法の理論的研究の外側にも内側にも重要な示唆を持つ研究である。

よって、本調査委員会は、本論文の提出者が、博士（文学）の学位を授与されるに十分であることを認める。